

---

# 月 神 楽

水鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月神楽

### 【Nコード】

N0750N

### 【作者名】

水鈴

### 【あらすじ】

故郷である郷と母を亡くした少女、沙夜は忌み子として忌み嫌われながらも、日々を懸命に生きていた。そんなある日、禁域である妖魔が蔓延る山へと登った沙夜は一人の青年と出会う。それが自分の運命を大きく変えることになるとは夢にも思わずに。

## 序 ハジマリ

赤、だ。

その光景を、一言で表すのならそれだけで十分だった。

目の前が、赤く、どこまでも深い赤へと染まっていく。  
カーン、カーンと狂ったように警鐘が鳴らされる中、沙夜はまる  
でどこか夢の中にいるようだと思った。

『山を下りなさい』

数刻前、母に言われた言葉が脳裏に蘇る。その言葉通りに今、彼女は一振りの懐剣を抱えて山を下っていた。

かちかちかち、と歯が鳴っていた。震えてくる手を強く握り込み、前だけを見て走る。

ともすれば砕けそうになる足を、折れそうになる心を、ただ支えるためだけに。

郷さとに、火がつけられた。

言葉にすれば、ただそれだけのこと。だけどそれは、沙夜のすむ郷にとって、それは絶対に『あり得ないこと』だった。

『いやああああっ!!!!』

『誰か・・・誰か助けて!!』

『結果はどうなっているんだ！ どうして火が・・・！？』

絶叫、そして悲鳴。数多のそれが交錯し、混乱する郷に追い打ちをかけるように現れたのは、もはや数え切れないほどの妖魔と獣の群れだった。

その中で、彼女の母はこう言ったのだ。

『逃げなさい・・・い、沙夜。一刻も早く・・・ここから』

突如現れた妖魔から沙夜を庇いきった代償に、胸を赤く染め上げて倒れた母はそう言った。震えてぼろぼろと涙を流す沙夜の手に、一振りの懐剣を握りしめさせて。そして、瞳だけは強い意志をこめて、何度もただそう言ったのだ。

『生きなさい。山を・・・下りるのです』

その強い瞳に気圧されるようにして沙夜が頷くと、母はほっとしたように少し笑い・・・そして、二度と目を開けなかった。

不意にまたその光景を思い出し、沙夜はまた涙が溢れてくるのを感じる。だがそれを乱暴に焦げた袖で拭い、腕の中にある、もはや形見となってしまうた懐剣をさらに強く握りしめ、彼女は残された言葉だけを胸に、ただ走り続けた・・・。

それから・・・どれほどたったことだろうか。

気がつくのと、いつのまにか周りはさらに暗くなっていた。

木々の間からは星々が煌めく暗い夜空が見え、不気味な獣の鳴き声が夜の山に木霊して、しきりに幼い少女の耳へと届く。

「・・・・・・・・っ」

その時間の流れを自覚した途端だった。さすがに限界だったのだろう、がくりと足が落ちそうになる。だがそれをかろうじてとどめてゆっくりと足を進め、やがて川を見つけると沙夜は倒れるようにして膝をついた。そのまま、貪るようにして水を口に含む。そして今度こそ、溢れる涙をそのままに、煤けた顔を川に浸した、そのときだった。

4

“　　ホウ。マダイキノコツテイルヤツガイタトハナ”

声が、聞こえた。

瞬間、ざわりと沙夜の肌が粟立つ。

どくどくと心臓が嫌に高鳴った。そして空気が動いたその瞬間。

沙夜は、咄嗟に横へ飛び退いた。

片腕だけで水辺から身体を無理矢理転がさせる。次の瞬間、熱い痛みが首筋に走った。短い悲鳴を上げ、沙夜は地面へ這いつくばる。

“ホウ、ヨケタカ・・・ヤルナ、コムスメガ”

低く、楽しげに嗤う耳障りな声が聞こえた。

痛みに朦朧もろうとなる意識の中、沙夜は必死に体勢を立て直す。懐剣の柄に手をやりながらようやく顔を上げた沙夜は、見た。

妖魔。

頭に浮かんだのは、山の民なら赤子でも知っているそれ。血を連想させる、不気味な赤い瞳だけが暗闇の中で面白そうに沙夜を見つめていた。瞬間、沙夜は直感する。

(に・・・げ、なきゃ)

でなければ。

殺される。

震える足を後ろへ移動させる。そして逃げようとした沙夜は、次の瞬間、自分の身体が宙に浮いているのをどこか信じられない思い



全身を血に染め、それでも最後は笑って逝った母の顔が同じように眼裏を過ぎ去った。

かあさま。

・・・その瞬間、沙夜の胸に宿った感情は何だったのか。

ただ、残された最後の力を振り絞って沙夜は懐剣を引き抜き。そしてそのまま、闇夜に煌めく銀の刃を自分をつり上げるその腕へ思い切り突き刺した。

ザンツ！！

骨と肉を断つ、鈍い感触が沙夜の手伝わった。さすがにこれは耐えがたかったのだろう。一際高い絶叫を妖魔は上げると、沙夜は次の瞬間、またもや空中へ投げ出されていた。

(かあ・・・さ、ま)

遠のいていく意識の中、沙夜はぐんぐんと遠ざかっていく月に向かって手を伸ばした。何かを捕まえるかのように一度大きく手を開く。そして、後を追うように落ちてきた懐剣を掴んだ感触を最後に、沙夜の視界は暗転したのだった。

## 序 ハジマリ（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

よろしければこれからもよろしくお願いします。

## 一、思み子

生きなさい、と言われた。

あの日、忘れもしない紅蓮の炎と幾多もの血の中。わたしの生まれ故郷で。

胸から赤い花を咲かせた母は、死に際のあのときでさえも、わたしの顔から一瞬たりとも目を外さなかった。

まるで、呪いをかけるかのように強い意志を瞳に込めて。

『生きなさい。山を・・・下りるのです』

その言葉に引かれるようにして頷いたのは、それが母の最後の願いだと薄々気づいていたから。

だから、わたしは　　。

うつすらと山の稜線に光を引きながら、日が山の向こうへと沈んでいく。

それを見て、ようやく今日の終わりを感じた沙夜ゆきよはほっとしたように息をついた。

(良かった・・・これで最後)

一日中水仕事や畑仕事に酷使した手が、ずきずきとさきほどから痛みを訴えてきはじめていた。

この、手の皮が剥ける感覚だけは何度経験しても慣れるものではない。もう少し、と自分を励ましながらやっと洗い終えたばかりの大量の洗濯物を一人で持つと、沙夜はよろめきながら一つの小屋の中へと入っていった。

「・・・随分と遅かったじゃないか」

向けられた冷たい言葉に、びくりと沙夜の身体が思わず竦む。それを意志の力でとどめ、沙夜は努めて感情を殺して「・・・はい」と短く答えた。

(平気)

心の中で、そう小さくつぶやく。このような扱いなど、いつものことなのだから。真っ直ぐに見上げてくる少女の顔をしばらく睨みつけるようにして見ていた年かさの女だったが、やがてちっと舌打ちをすると、一つの汚い皮袋を沙夜の足下に投げ捨てた。

「ほら、それがおまえの今日の駄賃だよ。拾ったならさっさと出てお行き！」

「……はい」

逆らわないこと。それが、ここで生き抜いていくための一番のやり方なのだ、すでに沙夜は学んでいた。

素早く皮袋を拾い、懐に入れるとすぐに小屋から出た。外に出ると、すでに日は沈んでおり、濃紺の空を残光が彩るばかりとなっている。

しかし、沙夜がその美しい夕闇に浸る暇はなかった。

「あ、忌み子が来たぞ！！！」

突如耳に届いたその『忌み子』という言葉に、沙夜はびくりとしてその声が出た方向を振り返った。

そして、硬直する。

なぜなら、そこには沙夜と同じくらいの年齢の村の子供達が立っていたからだ。

「……あ」

思わず、後退る。沙夜は懐にある、形見の懐剣を強く握りしめた。なぜなら、これから起こるであろうことを、彼女は正確に理解していたから。

「あっちに行け、この忌み子！」

「ほんと、暗くて嫌な子ね！」

「さっさと消えろ！」

数え切れない罵声と共に投げられるのは、石。次々に投げられるそれからかろうじて顔を庇いながら、沙夜は必死で逃げる。

『忌み子』

それがここで、沙夜を表す言葉だった。あの日、忘れもせぬ満月の夜に、崖から落ちて死にかけていた沙夜を拾ったのが、ちょうど沙夜の山の麓ふもとにあったこの村であった。

だが、助かったと思つた沙夜の淡い希望はすぐに打ち碎かれることになつた。なぜなら、彼らは沙夜の首にある毒々しいまでの不気味な赤い痣アザに気づいた途端、一様に冷たい態度を取るようになったからだ。

・・・いつしか、沙夜はこう呼ばれるようになっていた。

あの痣は村に災いを為すという証、あの娘は忌み子よ　と。

「・・・・・・・・つ！」

がつん、と一つの石が沙夜の額に避けきれずに当たる。じわりと薄く血を滲ませた額を手で押さえ、唇を強く噛みしめてただ沙夜はその場から離れた。

走りながら、なぜか涙が溢れそうになる。

あの満月の夜と同じように沙夜は走りながら、でもその心はまったくの正反対だった。

）・・・母様（

あの夜。母が生きると言ったから、沙夜はすべてを失ってもまだ生きようと思えた。

それが母の最後の願いでもあったから。だから、叶えてみせると思った。

だけど、今は。

「生きるのが・・・つらい、よ・・・母様」

もはや今は、誰も沙夜を名前で呼んでくれるものさえいないのだから。

一、忌み子（後書き）

次話もよろしくお願いいたします。

## 二、山へ

・・・どれくらい走っていたのだろうか。

気がつくくと、沙夜さやはいつの間にか自分の家である粗末な小屋に帰り着いていた。

戸は立て付けてなどおらず、吹きさらしで、常にすきま風が入り込む家の中にあるのも寝床である枯れた藁の束のみだけだ。しかし、心の底から沙夜はほっとすることができた。なぜなら、ここは確かに『沙夜』がいられる、今ではたった一つの確かな居場所だったのだから。

思わず浮かんだ涙を慌てて袖で拭い、沙夜は懐の今日の報酬である汚い皮袋を取り出した。

のだが。

「・・・え？」

思わず、彼女は声を上げた。

確かにあのとき懐にしまったはずの皮袋。しかし、その中に入っているはずの今日の沙夜の貴重な食料である米は、入っていないかった。

「嘘・・・！ど、どうして・・・!？」

ざっと青くなった沙夜は慌てて皮袋を引っ繰り返し、そして目を見張った。

なぜなら、袋の端の方が少しだけ破れていたからである。よく見ると、何か白い米粒のようなものが残っている。おそらく破れた端からこぼれ出てしまったのだろう。

「そんな・・・」

目の前が暗くなる。沙夜にとって、あれは本当に三日ぶりのまともな食料だったのだ。こういう非常時のためにと貯めている分は、前回の失敗のせいで大幅に食料を減らされていた間にとくに底を ついてしまっていたから。

「どうしよう・・・」

またじわりと涙がにじむ。ずきりと手足が痛みを訴えてきた。例え、もう一度米を分けてくれるように頼みに言ったところで、叩き出されるのがオチだということはもう分かりきっている。ただでさえ沙夜は村からの出入りを制限されている。が、かといってこのまま夕餉を抜けば体力が持たないことは確実だった。

そんなぐるぐると堂々巡りする思考を止めたのは、遠くの山々から聞こえてきた獣のような荒々しい鳴き声であった。びくりと沙夜の身体が強張る。

（妖、魔の声・・・）

あの満月の夜から忘れられない声だ。そのときだった。沙夜の脳裏に一つの考えが閃光のようにひらめいた。

（山・・・）

自分の手を見やる。ろくに手当もしないまま、毎日水仕事や力仕

事に慣らされた手は、すっかり節くれだつて年頃の娘の手とは思えないほどだ。そんな節くれにはつくりと開いた傷口は、沙夜に今では遠い過去を思い出させた。

母の手も、こうしてよく荒れていた。当時幼かった沙夜はよく分からなかったけど、周囲の人物達は常にそんな母の手を見ては顔をしかめ、何か諫めるような言葉を言っていた。その度に母はにっこりと笑い、何か言い返していたようだったけれど、裏ではこっそり郷の者でもあまり行かない森へ行き、荒れた手に良く効く薬草を摘んできていたものだった。

『・・・あなたも覚えておくといいわ。きつと役に立つから』

優しく笑つてそう言った母の顔が脳裏に浮かぶ。薬となる草木は高く見られるものだから　と、そう言っていた言葉が蘇り、思わず沙夜はぶるりと震えた。

確かに母の言っているとおり、沙夜のいるこの村でも薬草を持っている者たちは数少ない。さらに十分に持っている者たちと言えばさらに僅かだ。なぜならそれは、村のごく一部で栽培されているもので、生半可でない代価を払わなければ手に入れることが叶わないからだ。

だけどそれを手に入れることが出来れば。米一袋分など、安すぎるだろう。だけど、それだけでも沙夜にとっては大切で、十分すぎた。

・・・じくりと思わず喉が鳴る。

「・・・山へ」

行けるのだろうか、自分は。そう考えて、沙夜は自分でも驚くほど山へ行くことを拒否していない自分に気がついた。それは、もはや何も失うものなどないという妙に捨て鉢な思いからだっただけだからか

もしれないけれど。

ここで死んだように生きるか、それとも生きるために死ぬか。

大袈裟かもしれない。だけど、それでも。

きゅ、と唇を噛みしめて、沙夜は山を見据えた。沙夜が失ってしまつものといえば、もう命ぐらいしか残っていない。ならば、例え妖魔に襲われる危険があつたとしても、生きるために生きてみようと思つた。

・・・それがどんなにつらいことだとしても。

沙夜はあの夜、確かに約束したのだから。

沙夜は懐にある一本の懐剣を強く握りしめると、山へと向かう。

・・・これが自分のゆっくりと変わっていく岐路であつたとは思ひもせず。



### 三、月夜

今夜は、とても月が綺麗な美しい夜だ。

待ち人を待つ間、ふと木々の間から、天空の夜空に架かる月を彼は見上げた。思わず吸い込まれそうなほど幻想的で、暗闇の中、何かを導くかのように輝く月。

まるで、あの人のようだ、と彼は思った。こんな、紛い物である自分までにも最後まで優しくかった、まるで闇夜を照らす月のようだったあの人に。

「・・・い、おい、コウ！」

「・・・っ！」

『コウ』と呼ばれた青年は、そこではっとして振り返った。どうやら、少しだけぼんやりしてしまっただけらしい。そこには、昔からの幼なじみである青年の心配そうな表情があった。

いや、正確には二人とも頭から足先までを覆う蓋布を被っているの、表情は見えない。が、それは昔からの付き合いである故か、そんな顔をしているのだろうと彼は容易に察することができた。

「...ようやく来たのか、ワカ」

努めて声に抑揚をつけず淡々と応えれば、蓋布からかろうじて見える幼なじみの口元がほんの少しだけ歪んだ。だがそれも一瞬のこと、すぐに彼特有の柔らかな笑みが口元に浮かぶ。

「ああ、遅れて悪かったな。だけどお前がわざわざ俺を連れて行く

なんて思わなかったぞ」

「里の頭の固いジジイどもがうるさい。お前を連れて行けば少しはマシだ」

しれつと返された答えにがくつと青年の肩が落ちた。

「そーゆー理由かよ……」

「それに、お前も俺に何も言われなくても勝手に付いてきていただらう。毎晩毎晩鬱陶うっとうしい」

「……え？」

おまえ、気づいてたの!?

一拍遅れてから返ってきた叫びに、青年の口元がひくり、と引きつった。

「……何年お前と幼なじみやってると思ってる！ お前、やっぱり付いてきてたな」

「な!？ ってことは今のは誘導か……!？」

ひでえ！と抗議してきた幼なじみに、青年は不機嫌そうに答える。

「どこがだ。俺は付いてくるな、と事前にお前に言っていた」

「う……。そりゃ、そうだけだよ……」

もごもごと、口を動かせる。やがてぼそりと「……心配だったんだよ」と呟かれた言葉に、青年は肩眉を跳ね上げた。

「……あんま言いたくないけどな、お前、まだあのときのこと気に病んでるんじゃないのか」

「……。別」

「『別に』なんて言うなよ？ 結構、俺はあのじいさん達がうるさく言う気持ちも分かるんだ・・・こうしてお前がわざわざ探し回ってるんだからな」

何年幼なじみやっていると置いていやる、とそっくり返された言葉に、青年は思わず言葉を失った。黙りこんだ青年の耳に、「だけどな」とさらに言葉が続く。

「そのせいで、お前の気持ちもよく分かるんだよ。勝手に付いて来たことに関しては謝るけど、少しは立場自覚してしっかりしてくれ。じゃねえとまた付いてくるからな！」

「・・・ああ」

最後はにっと笑ってそっくりした幼なじみの青年につられて、思わずというように青年の口元が淡く綻んだ。

「分かった。今夜からは、ちゃんとお前を連れて行く」

また勝手に付いてこられたら困るからな、と幾分穏やかに言った青年の姿に、心の中で彼はそっと息を吐いた。・・・少しだけ、月を見上げていたときから、ずっと幼なじみを取り巻いていた痛々しい雰囲気や和らいでいたことに密かに安堵しながら。そんな彼の心中などいざ知らず、青年は「行くぞ」と短く言うと、腰を下ろしていた大岩から軽やかに飛び降りた。それを受けて、青年も軽く苦笑しながら飛び降りて、後ろからついて行く。

そんな二人の姿を、天空から黄金きんの月だけが見守るかのようには照らし出していた。

夜はまだ、  
始まったばかりだ。

三、月夜（後書き）

#### 四、記憶

山には、妖魔が住んでいる。

山の民にとって、これは赤子に生まれ落ちた次の瞬間から必ず教え込ませるものだ。山では天に向かって伸びやかに葉を繁らせる木々たちが、妖魔にとっては大きな味方となる。なぜなら彼らにとって、最大の脅威である日の光をある程度遮ることができ、なおかつ昼間にも関わらず、薄闇を作り出すためである。故に、山には常に妖魔達がいた痕跡である障気しやうきと呼ばれる、人にとっては有毒でしかない気がそこかしこに漂っているのだ。

『・・・特に崖の下や洞窟、そういった暗闇が常にある場所へは決して行ってはいけないわ』

覚えておきなさい　　怖い顔で、そう言った母の顔が脳裏に浮かぶ。そこは『障気溜まり』といわれる、もはや人が息することさえままならないほどの濃い毒気に侵されている場所なのだから、と。

『あなたは、まだ村で守られているから分からないだろうけれど』

幼い沙夜みやちの頭に荒れた手を載せ、ゆつくりとよく似た長い黒髪を梳きながら、母がゆったりとした口調でしゃべる。それが不意に止まった沙夜は思わず頭を上げた。母の真剣な色の宿る瞳が、そんな沙夜を真っ直ぐに射貫く。

『 忘れないで。わたしたちは、常にそう言った場所に住んでいるのだと言ったことを』

・・・木々に寄りかかり、乱れる息を必死に整えながら、沙夜はゆっくりと目をあけた。

随分と、懐かしい思い出を見ていたような気がする。例えるのなら、深く水底に沈んでいたものが不意に水面に浮かんできたとでもいうような。

(本当に・・・母様の言ってた通りだ・・・)

山には、妖魔が住んでいる。それを今、沙夜は肌で改めて実感していた。

ふらつきながら寄りかかっていた木々から身体を引き剥がす。そうしてまた沙夜は一步、また一步と歩みを進めた。

最初、一步山に入ったところはとうとうということは無かった。それが山の奥深くへと進めば進むほど、軽い目眩がするだけというごく軽い症状が、いつのまにか頭痛に変わり、今では全身にのし掛かるような強い倦怠感が沙夜の身体を襲っていた。

それでもまだマシなほうかもしれない。先の見えない暗闇に必死に目を凝らしながら、沙夜は明るい天空を見上げてそう思った。

(・・・今夜が月夜で、本当に良かった)

いくら木の葉が遮ってくれるといっても、必然的に闇に住まうモノである妖魔にとつて大人しくならざる得ない。流れる冷たい汗の感覚にふるりと身を震わせると、沙夜は努めて木々の間から差し込む月光に照らされた明るい場所へと移動しながらまた森の奥へと進んでいく。そして、どれくらいの刻が経ったのか。もはや軽く手足に痺れが起きるようになり、うまく足を前へと動かせなくなった頃、ようやく沙夜は崖の岩場でひっそりと生えた見覚えのある草花を見つけた。

「……………!」

思わず叫び出しそうになりながら、必死に駆け寄る。足場を確保し、微かに差し込む月光を当てに見てみると、それは特徴的な葉の形をしているようだった。

(葉の先が……もしかして)

記憶の中の知識と重ね合わせようと、思わず前へと大きく身体が乗り出す。……しかし、沙夜は知らなかった。足場とした岩場には亀裂が入っており、存外見かけによらず弱くなっていたことになど。

結果。

「つつ!?!」

がらり、と足場が崩れ、大きく前へと体重が傾いていた身体は、突然のその事態に対応できるはずもなく、実にあっけないほど簡単に空中へと投げ出された。うそ、と思わず沙夜が呟いた言葉は声に

ならずに虚空へと消え。

「きゃああああああっ！ー！ー！」

そのまま、沙夜の身体は深い闇の底へと落ちていったのだ  
った。

ねえ母さま。

なあに？ 沙夜。

どづして、がけの下やどづへつには『しよっきだまり』が  
できるの？

それはね、妖魔には強いやつと弱いやつがいるからなの。

じよいやじ？

そつ。弱いやつらはね、少しくらいの日の光は平気なの。  
でも強いやつらはそつじゃないのよ。

強いやつは、より闇に近いモノなの。だから

。

「……………」

小さなうめき声が聞こえた。

そこで沙夜は、ようやく目覚めた。・・・今、何か、大切なことを思い出そうとしていたような気がする。霧のようなものがかった視界の中、徐々に輪郭がはっきりと形を持つてくるのをぼんやりと眺めながら沙夜はそう思い、そして軽く頭を振った。同時にどうやら、自分はひどくごつごつして荒れた岩場にいるようだと思認識する。次の瞬間、身じろぎと同時に全身を駆けめぐった痛み、沙夜は小さくうめき声を上げる。それでも、のろのろとゆっくり身体を

起こした沙夜は、そこでようやく記憶を取り戻した。

「わたし・・・崖、から・・・」

呟く声と共にけほり、という軽い咳が出る。こういうのを、前にも味わったことがある。暗い空を仰ぎ見、沙夜は軽く自嘲の笑みを浮かべた。何という皮肉なのか、自分はまた、あの夜と同じように崖から落ちたらしい。そんな自分を思わず唾つたが、うまく息が出来ず、ひゅう、と沙夜の喉は鳴るばかりだった。おそらく、落ちた一時的な衝撃のせいなのだろう。なら、しばらくすれば直らないだろうか。妙にくらくらする頭を押さえながら、そこまで考えたところで、沙夜ははっと気がついた。

(・・・崖)

『崖の下や洞窟、そういった暗闇が常にある場所へは決して行ってはいけないわ』

脳裏に懐かしくも真剣な声音が蘇る。そして、沙夜は唐突に気がついた。先ほどから自分の周囲を取り巻くこの霧のようなものが、徐々に黒くその密度を増していつていることに。

(まさか・・・っ！)

咄嗟に立ち上がろうとしたが、足に力が入らない。一瞬遅れて、沙夜は今は自分が立ち上がれない状態に鳴っていたことに気づく。

思わず手の力だけで後退るものの、相手は霧。容赦なく沙夜に迫り、ついにはその華奢な肢体をすっぱりと飲み込んだ。途端、全身に悪寒が走り、どんとんと身体が痺れるように動かなくなっていく。ついには、身体を起こす力さえも奪われた沙夜は、後ろに大きく倒れ込んだ。

(そんな・・・!)

焦る意識とは裏腹に、目の前は次第に暗くなっていく。それを恐怖に感じる一方で、沙夜はどこかでそれを安堵してもいた。やつと・・・やつと終われるかもしれない、と。だが、それを拒むように、無意識に彼女の手は何かを掴むように伸ばしていた。しかしそれも少しのことで、すぐ空しくも空を掻いたその手はゆっくりと地面へ落ちていく、

・・・はずだった。

パシッ。

軽い、音が。

(・・・!!)

捕まれたその手の・・・もう、何年も触れられたことのない温かさに、瞬間、沙夜はぶるりと身を震わせた。思わず重い瞼を押し開けた、その先には。

あの忘れられぬ夜と同じ、美しい金色きんの月が、そこにあ

つ  
た。

## 五、出逢い

・・・その少女を見つけたのは、本当に偶然だった。

いつもと同じ、だが満月のせいで幾分明るい山の中を、木々から木々へと飛び移りながら駆け回る。

その途中、障気が妙に澱おりのように沈んでいるところがあった。もしかしたら・・・と思ってそこへ降り立ったのだが、どうやら違っらしい。これでもう何度目のことになるだろうか。ちっ、と苛立ちを軽い舌打ちにし、彼はその替わりのように見つけた、自分の手を握って気を失った足下の少女を見た。

「・・・・・・・・」

よく目を凝らさなくても分かる、まるでこの年頃の少女らしくない細い身体だ。おそらく、この少女は空腹の余り山に迷い込んだ人里の者であろう。

決して多いわけではないが、そういった訳あり者もまた少くないことを、彼は知っていた。

（それにしても・・・この濃い障気の中で意識を保っていた、とはな・・・）

気を失う直前、目を大きく開いて己を見てきた少女の顔を思い出す。人間にしてはよほど耐性があるのか…。そんなことを考えながら、彼は取り敢えず足下の少女を無造作に肩に担ぎ上げようとした。何にせよ、ここで死なれるのは目覚めが悪すぎる。そう思って。

だが。

その途中で彼は大きく目を見開いて動きを止めた。

「……っ！」

月光など無くても、闇夜を見透かすことのできる彼の両眼が、少女の露わになった白い首筋の『それ』捉える。その、毒々しいまでの鮮やかな色彩は、彼にとって決して忘れられない色だった。

『　　』　　コ、ウ……ごめん、ね……』

もう遠い日に失ってしまった、大切な声が脳裏に蘇る。どくりどくり、と妙に耳に届く自身の心音を聞きながら、彼は小さく呟いた。

(……見つけた)

全身に大きな震えが走る。しばらく、青年は黙って腕の中の少女を見つめた。そして、つい……と目を移すと同時に、少女が強く握りしめている一本の古い懐剣に気づき、またも瞠目する。

「……これは」

小さく呟き、なるほど、と一つ頷く。

そして、顔を上げて天空を見た青年の瞳には。

決然とした、強い光が宿っていた。

暖かい、と思った。

耳元で、風を切るひょうひょうという音が聞こえる。

だけど、そんな夜風の冷たさは沙夜みやには一切無くて。代わりに全身に伝わってくるのはほっとするような暖かさだけだ。

ぼんやりする意識の中で、昔母に抱きしめてもらったようだと思いながら、そのまま彼女は意識を手放した。

そして。

「・・・・・・・・」

ここは、どこだろう・・・と沙夜は思った。

試しに身体を動かせば、鼻孔に青臭い薬草の臭いがとどくのと同じく、ずきりとした痛みが全身に走る。それで、これがどうやら現実のようだと思いは実感した。視界に映る、見覚えのない粗末な天井を見ながら、これまた身に覚えのない寝具の上で沙夜は己の記憶を辿ってみる。

「確か・・・崖から落ちて・・・それで・・・」

そこに吹きだまっていた、濃い障気溜まりの中で・・・そう、無意識に伸ばした手を握ってくれた、誰かの手に縋り付いたまま・・・

「っ!」

咄嗟に、ぱつと起き上がろうとする。だが、同時に鋭く足に走った衝撃に耐えきれず、がくりと膝を折った瞬間だった。

「あら。貴方、起きたのね？」

「!？」

急に、背後から声があった。

長年の習性で思わず大きく身体を揺らす。そして、そろそろと背後を振り返った沙夜は、次の瞬間、目を大きく見開いて言葉を失った。

立っていたのは、薬草か何かを入れた籠を持つ若い女。しかし、その女には。

「もう身体の方、大丈夫かしら」

腰から伸びる、ふっさりとした・・・見るからに柔らかそうな毛並みの良い尻尾。

そして、頭頂付近にあるのは同じようにぴょこりと出た獣の特有の・・・耳。

詰まるところ、普通の人間にはどうやっても無いであろうモノを備えた女が、そこには立っていたのだった。

## 六、サツキ

「・・・あ、の」

状況を理解するのに、数瞬の間が空く。ややあつて、沙夜はようやく声を上げた。

「？ 何かしら？」

「あの・・・その」

至つて普通に返つてきたその声に思わず沙夜は口ごもる。だが・・・  
・どうしても気になつて、二度彼女ふたたびは目の前の女の頭頂付近と、腰からふつさりと生えている『それ』を見た。そんな、なにやら物言いたげな沙夜に気づいたのだらう。軽く小首を傾げ彼女はその視線の行き着く先・・・つまり、自身の『それ』に目をやり、そこであ、と声を上げた。

「もしかして、これのことかしら？」

そこで、おもむろに女は籠を下に下ろす。と同時に少しだけ目を瞑つた。その瞬間、今まで確かにあつた獣の耳や尻尾がふつと無くなり、沙夜は思わず、え、と目を瞬いた。

「ごめんなさい。あなたは人間なんだったこと、すっかり忘れていたわ」

『人間だつてこと』

その意味ありげな言葉に、沙夜は思わずじつと目の前の女を見つ

めた。あの異様な耳と尻尾さえ無ければ、自分とさほど変わらない、それが少し年上ぐらいに見える女性。しかし、どこか違和感があった。先ほどに例えるのなら、無理矢理何かを隠しているとも言うような。

・・・急に、どくりと心臓が高鳴った。

「ここは・・・どこ、何ですか」

昼間で、よく陽光が取り入れられた明るい部屋の中が、急に暗くなったような気さえた。見知らぬ場所、そして何よりも・・・『人間』ではないかもしれない目の前の女の存在が急に不気味に思えてくる。

そんな沙夜に、女は何故か少し驚いたようだった。

「あなた・・・まさか、コウから何も聞かずにここに来たの？」

「え・・・？」

『コウ』。聞いたことがないその名に、沙夜は戸惑って女を見上げた。一方の女の方はといえば、沙夜の様子で全てを悟ったらしい。不安げに胸元を押さえた沙夜の肩に手を置くと、女は幾分か改まった口調で「安心して」と言った。

「ここは、隠れ里。私たち 銀狼族 が住まう、山の谷の底にある村よ」

「ぎんろう・・・ぞく？」

「ええ。あなたは一昨夜、コウに連れられてこの里にやってきたの。今は、あれから三日も経っているわ」

噛み含ませるように、慎重に言葉を紡ぐ女。沙夜は大きく息を吸

い込んで、ゆっくりと吐きだした。

「どうして・・・ここに、わたしは」

連れてこられたんですか、と。その言葉を口にする前に、沙夜は困ったような女の顔を見て、彼女がその答えを知らないのだということに気づいた。言葉を失って、夜具を思わず強く握りしめた沙夜の手には、ふわりと女の手が被さった。

「大丈夫よ。あなたがどうしてここに連れてこられたのか、分からないけど・・・でも、あの子のことだから。きっと悪いようにしないわ」

につこりと。まるで、何の心配も要らないというかのように、言葉より真摯に伝えてくるその眼差しに、沙夜の胸の奥で何かが解けていくような気がした。同じように、夜具の上で固く握りしめられた手も、ゆっくりと緩くなる。そのことに気づいたのか、女はまたにつこりと笑うと、「さて、と」と言っ下置に置いていた籠をまた抱えて夜具の上の沙夜の傍へと寄った。

「本当は、もっと話して欲しいこととかたくさんあると思うけど・・・まずは、あなたのその怪我から先にしましょうか」

でも、その前に。そう続けて、女は腰を折って沙夜とおもむろに視線を合わせた。

「あなたの名前を覚えてくれるかしら？ わたしはサツキ。あなたは？」

真つ直ぐに見つめてくる、何の嫌悪も、そして嘲笑する色も浮かんでいないその瞳に一瞬、沙夜は息を止めた。名を聞かれたのだと、しばらく経ってからそう理解し、声を出そうとする。

だが、声は出なかった。

「……あ……」

その代わりに漏れたのは、嗚咽<sup>おえつ</sup>。いきなり目の前で涙を流し始めた少女に、女　サツキは少し慌てたようだった。どうしたの、どこか痛いところが……ときりに声を掛けてくる。その、優しい言葉たちに、首を振って、彼女は必死に声を絞り出した。

「つ……だい、じょ……ぶ。わたし、は……さよる……  
つていい……ます」

やっとの思いで絞り出した声は、みつともないほど震えていた。だが、サツキは微笑んで「そう、『沙夜<sup>さよる</sup>』というのね」と言うと、そつと沙夜の頭に手を置いて、優しく撫でた。まるで、幼子を相手にするかのような扱い方だ。だがそれは沙夜に、幼い日の母の手のひらの温もりと、忘れていた暖かさを思い出させるものだった。

「連れてきた娘が、目を覚ましたそうだけ」

その知らせが彼の耳に入ったのは、沙夜が目を覚ましたその日の夕暮れ刻のことであった。コウ、と呼ばれたその青年は、薄闇に包まれた小屋の中、片膝を立てて座ったまま、静かに目を閉じていた。だが、音もなく戸口に現れた幼なじみのその声に、ゆっくりと瞳を開ける。

「……そうか」

「コウ……まさか、本当なのか？ あの娘が……」

立ち上がって小屋を出た彼の後を追って、戸惑いを含んだ声がかかる。その幼なじみの顔に、彼はちらりと視線を向けた。そして短く「ああ」とだけ答える。顔色が変わった彼に、尚も続けて彼は言った。

「お前にもこれから行くところに、来てもらおうぞ」

「……どこへ行く気だ？」

疑念と、僅かな緊張を含んだ声。相変わらず、この件に関してはいつもは軽い幼なじみも、慎重になるらしい。鋭く射貫くような目を向けてくる。彼は嘆息して、口を開いた。

「……あの石頭をしたジジイ共の所だ。俺はあの娘を、花嫁に迎える」

「な……につ!？」

そう言った瞬間だった。先程の比ではないくらい、幼なじみである青年の顔色が変わる。

「お前……自分の立場が分かって……!!」

「もう決めた。俺は反対するのが例えお前だとしても、曲げる気はない」

一切の揺らぎを見せずに言い放たれたその言葉に、彼は思わず絶句した。

「……一つあのじーさん達は、易々と頷かないぞ」

「頷かせる。そのための策は考えた。後は、お前の口添えだけだ」

直ぐさま返されたその答えに、彼は深々と息を吐いた。言いたいことは、胸の内に数え切れないほど、ある。だが。彼は胸の内にある一つの面影を去来させながら、代わりに言葉を紡いだ。

「……一つ聞く。それは、あの娘を使<sup>っ</sup>つたためか？」

答えは無かった。だが、その真っ直ぐに見つめてくる瞳を見れば、伝わってくるものはある。無言になった彼に、目の前の青年は努めて静かな声で言った。

「協力してくれるか、ワカ」

決して強制などではないその言葉を、今日ほど苦々しく思ったこととは無いだろう。そう思いながら、彼は返事の代わりに特大のため息を吐くと、隣に並んだ。

「……行くぞ」

努めてぶっきらぼうな口調で言う。「ワカ」とかかる声を無視して、彼は「勘違いすんなよ」と言った。

「俺が行くのは、お前が立場を忘れてまた無茶しないか、見張つてやるためなんだからな！」

「……ああ」

振り返って勢いよく突きつけられた指に目を見開く。だが、それは……。小さく、青年の口元に笑みが浮かんだ。そして彼は、それで十分だ、と穏やかに返したのだった。

## 七、言伝（前書き）

ちよっとレイアウトを変えてみました。  
見にくくなってしまったらすみません！！

## 七、言伝

忘れられない、色がある。

それは、己が犯した罪の証。決して忘れてはいけない記憶。

『泣いてるの?』

思い出したいのは、あの人がいつも浮かべていたはずの優しい微笑み。だけと思ひ浮かぶのは、血にまみれても尚、半月を描いた口元だけだ。

『・・・ごめんね』

誰よりも優しく、そして自分にとってかけがえのない存在だった、あの人。

だけだ。

その人を殺したのは、まぎれもない自分だった。

例え、直接手を下したのが自分では無かったとしても。

すると、自分の足首に白布が手際よく巻かれていく。その、

二度目である故か少しだけ見慣れた光景を、寝起きの少しぼんやりとする頭で、沙夜は見ていた。記憶の中の、見覚えのある薬草の青臭い臭いがふわりと彼女の鼻孔に届く。それを素直に、懐かしい、と沙夜は思った。

「沙夜さん、次はこちらを手当してもいいかしら？」

「・・・っ、は、はい・・・っ！」

掛けられた声にはっとして、足下へと向けていた顔を沙夜は上げた。同時に、目の前のサツキの浮かべる笑みに少しだけ詰まる。言われたとおり、恐る恐る怪我をしている片腕を差し出しながら、沙夜は蚊の鳴くような声で「・・・すいません・・・」と呟いた。

「いきなり、泣いたりなんかして・・・」

あれから、今は一昼夜が明けていた。その後、沙夜は心のどこかが切れてしまったかのように涙を流し続け、手足の怪我の手当をしてもらうなり、そのまま眠りに落ちてしまっていた。そのことを改めて思い返し、沙夜は恥ずかしさのあまりに思わず俯く。しかし、返ってきたサツキの反応は穏やかなものだった。

「どうして？ 泣きたいときは、泣いたほうが良いと私は思うわ」

顔を上げて、という言葉に沙夜はおそろおそろ顔を上げる。目が合うと、サツキはにっこりと微笑み、「終わったわ」と言って優しく沙夜の手足を撫でた。

「二、三日はあまり動かさない方が良くもしいわね。もっとも、これじゃあ動かすのが難しいろっけど・・・今は、痛みはな

いのかしら？」

実際、動かさなければ痛みはほとんど感じなかった。頷くと、サツキは安堵したようにそう、良かったとまた笑う。それに自然と頬が熱くなり、思わず下を向いたときだった。

「あ、こんなところにいたんだ、サツキさんってば！」

唐突に、高い声が響いた。と同時に戸口からいきなり中に入ってきたそれに驚いて、沙夜は思わず硬直する。そんな沙夜とは反対に、サツキは少しも動じず呆れたようにその人物に向かって声を掛けた。

「・・・ユツキ。あなた、怪我人がいるんだってことわかってい  
るのかしら？」

「へ？・・・って、ああああ！ その子、目を覚ましたんだ！  
うわあ、あたし人間の女の子なんて初めて見るんだよね。ね、あ  
んな名前なんて言うの？」

ぱあつと表情を明るくさせ、軽やかな足取りで沙夜の枕元にやつてきたのは、沙夜と見た目が同い年くらいの少女だった。肩につく  
かつかないかというほどの長さの栗色の髪に、くりくりとよく動く  
同色の瞳。しかし、身につけている衣はサツキとは違い、動きやす  
さを重視しているのか、肩や膝の上ではっさり切られている。さ  
らに、手には手甲てっこうを、脚には臍すね当てをしているその姿は、およそ沙  
夜が見てきた村の少女達とは遠くかけ離れているものだ。

目を睜みつて、沙夜が目の前の少女を見つめっていると、隣からふと、  
「ユツキ？」という低い声がした。

「わたしが何て言ったのか・・・聞こえてなかったのかしらね？」

につこり。そういう擬音が聞こえてきそうな笑顔で言ったのは、サツキだった。しかし、笑っているのに、目だけはまったく笑っていない。そんなサツキの不穏な気配を察したのだろう。ユツキ、と呼ばれた少女は、口元を引きつらせながら「・・・ゴメンナサイ」と呟いた。

「もう・・・その元気が良いのは良いことだけれど、少しは落ち着きというものも持ちなさい。　沙夜さん、この娘はユツキ。わたしの姪です」

「姪・・・？」

そう言われて、改めてよく見てみると、すつと通った鼻梁や笑みを浮かべている口元など、どこかしらサツキに似通った部分がある。おずおずと、沙夜は自分から少しだけ近寄った。

「は・・・じめまして。わたしは・・・沙夜っていいいます」

そう言った瞬間、目の前で少女の顔が嬉しそうに輝く。次の瞬間、ユツキは沙夜の手を取ると、大きく上下に振った。

「可愛い、沙夜ちゃん！　仲良くしてね！！」

「え・・・は、は、はい・・・っ？！」

握られた手に動揺しつつも、思わず返事をしてしまう沙夜。そんな混乱する沙夜に、見かねて声を掛けたのは、サツキだった。

「こら、ユツキ。沙夜さんは怪我人なんだから、そこまでにしなさいな。それよりあなたがわたしの元にくるなんて・・・何かあったのではないの？」

「え？ あ　　．．．あ、そうだった！」

そうサツキが言った瞬間だった。ぴょん、と急に彼女は飛び上がるようにして沙夜の手を離れた。そして少し離れると、ぴんと背筋を伸ばし真っ直ぐに沙夜を見る。その真剣な雰囲気、沙夜も思わず背筋が伸びるのを感じた。

「　　長おんから言伝いことを預かって参りました。『今宵、岩戸にて洗月とその連れてきた村娘の処分を下す。夕刻に迎えを寄越すまで、沙汰を待つように』．．．だそうです」

「．．．それは」

サツキが驚いたように息を呑んだ。沙夜も思わず息を詰める。長それは、この里の指導者のような存在なのだろうか。知らずのうちにぎゅ．．．とまた夜具を握りしめる。それと同時に、どくりと胸が高鳴るのを感じた。

(．．．『洗コウ』．．．)

自分を　この、隠れ里へと連れてきた人物。そして．．．。その先を考えようとして、ふると沙夜は頭を振った。もしかして、あの夜に自分の手を掴んだのが、その『彼』ではないかと思っただのだ。

(まだ、分からないもの．．．)

小さくそう呟く。それでも、あの掴んでくれた手の温もりは未だに沙夜の中に残っていた。

「沙夜さん．．．大丈夫？」

夜具を握りしめたまま、俯いている沙夜を心配したのだろう。サツキの案じる声に、沙夜はゆっくりと顔を上げ、頷いた。

「……大丈夫、です」

正直言つと、怖かった。『処分』というその言葉。それが暗に何を指すのか……分からない沙夜ではなかった。何しろ、元いた村でもずつと言われてきたことだ。だけど今、自分がどんな『処分』にされてしまうということよりも、自分を連れてきたという、その人物を見てみたいという気持ちで、沙夜を強く突き動かした。

……震える唇を噛みしめる。そうして、彼女はゆっくりと言葉を紡いだのだった。

## 八、対面

ゆっくりと、東から西へと陽が傾いていく。

その自然の摂理を、沙夜は戸口から室内へと差し込む光によって感じていた。

「……………」

ごくり、と喉が鳴った。

口の中がからからに乾いているのだろう。つばを飲み込もうとしたが、上手くいかなかった。

一体、ここに一人で残されてから、どれほどの刻が経っただろうか。心配そうな顔をしながらも、『迎え』に沙夜以外の同行は認められていないという理由で、ついていくことを諦めたサツキの顔が脳裏に浮かんだ。

『これは……………あなたに返すわね』

そう言って、自身の家から出るサツキに渡されたのは、沙夜の懐剣だった。

驚いた沙夜に、サツキは笑いながら大切なものなのでしょう？  
といったのだ。

そういう物は、必ず持つべき人が持っているべきなのだ。

懐にあるそれを、不安を押しつぶそうとするかのように、強く衣の上から掴む。すると、少しだけ強張っていた身体から力が抜けたような気がした。

「……………はあ」

心を落ち着かせようと、目を瞑り、静かに息を吸って吐く。  
そして、沙夜はただ待った。

・・・いつしか、辺りは夜の帳が降りていた。

開かれた戸口から、しきりに夜風の冷たさが顔に、身体に伝わってくる。

それが不意に途切れたとき、沙夜はとうとうそれが来たのだと思っ  
った。

ゆっくりと目を開けたその先。そこには、音もなく佇む人物の姿  
があった。

「 長の命により、あなたを迎えに参りました」

現れたのは、頭からつま先までを覆った夜闇にも浮かび上がる、  
白い蓋布の人物。

その、丁寧だが有無を言わせない言葉に沙夜は小さく喉を鳴らし  
たのだった。

沙夜が連れていかれたのは、意外にも里の外れの崖だった。

「ここから中に入ります」

そういつて蓋布から出た指先がおもむろに指したのは、沢山の岩や石が転がる中、まるで何かを隠すかのように、立ち塞がった一つの大岩だった。

大の大人でさえも持ち上げることが難しそうなそれに蓋布の人物は少しの躊躇なく近づき、何かを呟く。すると、軽い地響きを伴って、大岩は横にずれた。

「……あ」

思わず夜が息を呑んだそのとき、その開いた隙間から、一人の人影が現れた。

はっとするほど高い背を持ったその男は、沙夜に一瞥もくれずただ淡々と低い声でこう聞く。

「…きたのか」

「ああ」

沙夜をここまで案内した人物と同じように、蓋布を被った人物が、幾つか言葉を交わす。

やがて彼らの視線は後方の沙夜へと移動し、思わず彼女は身体を縮めた。

「…この娘なのか？」

「そうらしい。…只の小娘にしか見えないがな」

交わされるのは決して好意的なものではない。それらを、沙夜は身体を固くしてじっと耐えた。

また、身体が指の先から冷えていくような、あの感覚を思い出しながら。

そんな、唇を引き結び俯いたまま沙夜の様子にすぐに興味が削がれたのだろう。ふん、と鼻を鳴らし、おそらく岩を中から退けたであらう人物は、そのままするり、と奥へと消えた。

その後を追うように、沙夜達も岩の隙間から中へと入る。洞窟の中は、複雑に入り組んでいるらしく、幾つもの穴があいていた。それらの穴を次々通りながら、闇の中でも浮かび上がる白い背中を見失わないように必死に沙夜は追いかける。

そして、最早幾つもの穴を通ったのかが分からなくなった頃、それは唐突に終わった。

「！」

思わず、息を呑む。そこは、まるで昼間かと思間違っほど明るく、そして何よりも広かった。まるで広場のようにあけたその空間には、壁にくり抜かれた穴に幾つもの灯りが灯されている。

闇に慣れた沙夜の目に、それらはあまりに明るすぎて目を細めたとき、それは聞こえてきたのだった。

「ようこそ我らの里へ、人間の娘よ」

「……………っ！！」

広場の、中央。

そこには、十人ほどの初老の男達が左右に並んで座っていた。いや、その後ろに控えるようにして幾人かの若い青年や女たちが並んでいる。

そしてその奥。その少しだけ高い上座には、一人の人物の姿があ

った。

おそらく年齢は五十を過ぎたところといったところか。少し皺の入った顔に、人好きのする笑みを浮かべた男が座っていた。しかし、沙夜はその一見普通の男にしかに見えないその姿に、どこか違和感を覚える。

……いつのまにか、手がかたかたと軽く震え出していた。

それを悟られないよう、胸元の前で強く握りしめて沙夜はその男を精一杯真っ直ぐに見つめる。

そんな沙夜を見定めるかのように、男は暫く薄く笑みを浮かべたまま、沙夜を眺めていた。

「……席は用意してある。座るといい」

やがてすつと指がある一点を指す。釣られて目を向けるとそこには、確かに一つの空席があった。

手と同じように震える脚を必死に進め、努めて沙夜は静かに座る。それを見た男は、軽く笑った。

「娘よ。我らが怖いか？」

「……え？」

「正直に答えるが良い。君は分かるのだろうか？　我らここにいる者達全員が人ではないと」

一瞬。何を言われたのか、沙夜は分からなかった。

まるで背筋に何か冷たいものを押し当てられたような感覚に、沙夜は絡まる口を必死に動かす。

「……それは……どういう」

「ふうむ。サツキから君は何も聞いていないのかな」

サツキ。

そう、困ったように言われて、沙夜は唐突にあることを思い出した。

『ここは、隠れ里。私たち 銀狼族 が住まう、山の谷の底にある村よ』

あのとき。急速に脳裏に蘇るのは、あの急に見知らぬ場所に連れてこられて不安に駆られていた沙夜に、サツキが言った言葉だ。

そして・・・その前を見た、決して人の持つ物ではない獣のそれも。

「ぎんろう・・・ぞく」

そう、沙夜が呟いた瞬間だった。

目の前の男は、にっこりと微笑んだ。

・・・それが、何よりも真実だと言うことを端的に示すかのよう

に。  
「さて、ではまずは自己紹介といこうかね？」

そう言った男と周りの人物達の頭と腰からは、すでにあのときのサツキと同じ銀色の獣の耳と尻尾が生えていた。

## 九、一族

・・・つう、と沙夜の額から顎に向かって汗が一筋流れた。

だが、それだけだった。ごくりと二度喉ふたたびを鳴らし、目の前の人物を静かに沙夜は見つめた。その、どこか落ち着いた反応に、男は面白いものでも見るかのような視線を向ける。

「・・・ふむ。やはり・・・か」

小さく何かを呟く。しかし、それは沙夜には聞こえなかった。え？と聞き返した沙夜に男はふっと笑みを漏らした。

「いや、こつちの話だ。それで、君の名は何というのかね」

「・・・沙夜、といいます」

「沙夜さんか。わたしは颯月ソウゲツと言う。この里の長を務めている者だ」

そう言うと、颯月、と名乗った人物はゆつたりと微笑んだ。その余裕のある仕草はいかにも自然で、確かに彼がこの里を治めている人物なのだと感じさせる。

・・・ぐつと強く握りしめた手を気取られように片方の手で隠しながら、沙夜は慎重に口を開いた。

「・・・あの。聞きたいことが、あるんです」

「何かね？」

「どうしてわたしは・・・この里に、連れてこられたのですか？」

この里をまとめている長。と、言うことは颯月がこの里に自分を連れて来させたということにならないだろうか。そう考えた沙夜は、

真っ直ぐに彼を見つめてそう問うた。しかし、その問いにそれまでにこやかだった颯月の顔が急に険しくなる。

「・・・沙夜さんは、わたしがこの里へ君を連れて来させたと思っ  
っているのかね」

「え？」

「我らは、この里へ人は一切招かないと掟で定めている。・・・  
理由は、言わずとも分かるだろう。我らのこの容姿は、『彼ら』に  
とってただの化け物でしかないだろうからだ」

化け物でしかない。

・・・その台詞に、沙夜ははっとした。思わず、普段は髪に隠さ  
れて見えない首筋にある痣を思い出す。そんな沙夜に構わず、颯月  
は努めて淡々と答えた。

「・・・昔、我らは人と交流を持っていたことがある。しかし、  
あるとき人は自身と違う者を見ると嫌悪し、排除しようとする生き  
物なのだと思います。それ以来、我らが人と交流を持ったこ  
とは一度としてない」

「・・・」

颯月の言葉はあくまでも静かだった。だが、その言葉の裏に押し  
込められた感情を感じ、沙夜は言葉を失う。

「しかし、その掟を洗月は破った」

「！」

『洗月』。その暗く眩かれた硬い言葉に、沙夜ははっとする。

「沙夜さん、君は我ら 銀狼族 という一族のことを何か知っているかね」

唐突にそう聞かれた沙夜は、戸惑いながらもゆっくりと首を振った。その沙夜の反応を予想していたのだろう、颯月は一つ頷く。

「山には、妖魔しか棲まうものがない・・・大方の山の民はそう思っている。何しろ、『ここ』は人が住める場所ではないからなだが、だからこそこうして我らはひっそりと住むことができる訳だが」

「・・・あなたたちは、妖魔なんですか？」

山の濃密な密度の障気の中にあっても、生きていけるモノ。

それは妖魔だ。

しかし、それを聞いた颯月は苦笑した。

「やはり沙夜さんから見れば、そう見えるのだろうか・・・だが我らは、妖魔ではない」

そこで、颯月は一度言葉を切った。

「ある意味妖魔であり、妖魔でないモノ。それが我らだ」

「? どういう・・・」

妖魔であるが、妖魔ではない。

その意味深な言葉に思わず沙夜は眉を寄せた。その反応に、颯月は少し笑うと話題を変える。

「沙夜さん、君は妖魔にも階級が存在することを知っているかね」

「階級・・・ですか？」

「そうだ。実は一見無秩序に思える妖魔にも、人と同じように階級が存在している」

颯月によると、それらは上級、中級、下級と言ったような三つの大きな階級にまとめられるのだという。その初めて耳にする話に、沙夜は驚いて目を見開いた。

「下級、中級・・・奴らは階級が上がるにつれ、その食欲も旺盛になる。しかしそれよりも厄介なのは、人語を解し始めることだ」

「人語・・・を？」

「人語を解し始めた妖魔は、やがて人語を操れるようになる。さらに上級ともなれば、奴らは人とほとんど変わらない知能まで身につけるのだよ」

「そんな・・・」

沙夜は思わず声を上げた。それまで、彼女は漠然と妖魔というのは知能が劣っているものだという認識を勝手に持っていた。だが、それは違つと颯月は言う。もし、颯月が言つとおり、妖魔が人と同じ知能を持つというならば

・・・唐突に、沙夜の鼓動が跳ね上がった。

「まさか・・・」

喉が急速に乾いていくようだった。こころなしか、腰が引き気味になる。うすうす分かつていても、聞かずにはいられない。そんな沙夜の心中を分かつたかのように、颯月は笑みを浮かべていた。その口元から少しだけ覗いた鋭い犬歯が、広間に満ちる灯りに照らされて、鈍く光る。

それはまるで、いつかの夜の銀の輝きを沙夜に思い起こさせた。

「そう。我らは妖魔と人との間に生まれた種族なのだよ」

・・・淡々と告げられた、その事実が沙夜の息を一瞬止めた。

## 九、一族（後書き）

今回は本当に遅くなってしまい、申し訳ございません!!

活動報告でも書いたとおり、ひとまず周りが落ち着いたので  
また頑張って執筆にいそしみたいと思います・・・!

では、ここまで読んでいただき本当にありがとうございました!!

## 十、巫女

まるで刻が止まったかのようだった。

沙夜は、今言われた信じがたい事実を必死に頭で考える。そして、からからに乾いた口から、かろうじて言葉を絞り出した。

「……妖魔……が、人と心を通わすことができるんですか」

少なくとも、沙夜の知る妖魔は獰猛で何よりも人肉を好む残虐な生き物だ。その妖魔が、主食としか見ていないであろう人と心を通わしたとは。

大きく揺れる沙夜の瞳に、颯月は静かに言葉を紡いだ。

「信じられない……と君はいうのだろうか。だが、それが真実なのだよ。だからこそ今、ここに我々という種族がいるのだから」

「……」

「我々は、決して妖魔ではない。しかし、人でも無いのだよ」

「人ではない」 その言葉が沙夜の中でゆっくりと咀嚼され、

頭にじわじわと広がってゆく。そこで沙夜は初めて先程の言葉達を思い返し、その中におかしなものが混じっていたことに気がついた。しかし、沙夜がその疑問を口にする前に、先に口を開いた者がいた。

「……颯月様。対談中、大変失礼ではありますが、申し上げたいことがございます」

そう言って、静かに前に進み出てきたのは背の高い青年だった。その声と背で、沙夜はこの青年がここに来る前にあの大岩を除け

た人物だと気がつく。すでに先程蓋布がいふを取り、灯りに照らされた精悍さの漂う彼の顔は、険しさに満ちていた。

そのただごとではない顔つきに、広間に緊張した雰囲気が流れる。その中で、呼ばれた颯月だけは、態度を変えずに「何だ？ 紅月アカツキ」と言った。

「……見ればここにはもう一人の肝心な人物の姿がないようではありませんが……それはどういふことでございますか?! 彼こそがこの娘を勝手に連れてきたのだと言ふのに……!」

紅月、と呼ばれたその青年は語気も荒くそう言つと、振り返つて沙夜を見た。まるで親の敵でも見るかのような敵意の込められたそれに、沙夜は困惑して身体を縮ませる。

「何か用があつて遅れているだけだろう。じきにあれはくる」  
「今宵はこの娘と彼の処分こそが本題でありましょう! それがここに彼がいなふことに納得出来る理由になりません!」

諭すように言つた颯月に、噛みつくように紅月が言ふ。  
突如陥つた一触即発の状態に、沙夜は混乱する。思わずどこかに助けを求めるかのように、彼女が視線を彷徨させたそのときだった。

「……あーあ。やっぱりこうなるか」

「!?!」

いきなり、場にそぐわない声がその場に響いた。

呆れ返つたとしてもいふようなその声音に、思わず振り返つた沙夜たちが見た先には、蓋布を纏つた二人の青年が立っていた。

年齢は共に十代後半だろう。その場に満ちた微妙な雰囲気構わず、その内の一人が真つ直ぐ歩いてくる。

そして、呆気にとられていた沙夜の隣まで　　つまり、颯月の前まで彼は来ると、おもむろに蓋布をとった。

その瞬間、沙夜は目を大きく見開いてその人物を見つめた。

「……………っ!」

金色きんの、月。

その青年はまるで、闇夜を照らす月のような美しい金色の瞳をしていた。

手が震える。

いや、身体全体が震えているのだろう。しかし、それは先程とは全く違うものから来る震えだった。

沙夜が、あの夜に伸ばした手を掴んでくれた青年がそこにはいた。

「洸……………月」

先程の、紅月という青年が低く呻くようにその名を呼ぶ。

……………しかし、その青年はちらりと沙夜たちの方を見ただけで、興味がないかのようにすぐに視線を外した。

代わりに、静かにその場に跪く。そして、青年は落ち着いた声音と共に深く頭を下げた。

「……………今宵は遅れまして大変申し訳ありません、颯月様」

「ようやく来たか。洸月よ、それでお前は何をしていたのだ？」

先程までのことがまるで無かったかのように、颯月は淡々とした口調で問いかけた。それは、敢えて感情を殺しているようにも聞こえる。それに、彼はゆっくりと後ろを振り返った。それに答えるように、同じように後ろの蓋布をとった青年がにっと笑い、その後ろからざり、と音がした。

「……………」

息を呑む音が聞こえた。

現れたのは、沙夜よりさらに小柄な、背中を丸めた老婆だった。しかし、その身につけているものは白い小袖に赤の緋袴という巫女装束だ。

「老巫女さま……………」

呻くような声で、颯月がその人物の名を呼んだ。

## 十、巫女（後書き）

またもや更新が遅くなってしまいました・・・。

これもあの殺人的なレポートのせいです！・・・いえ、ごめんなさい。終わらせなかった自分のせいですね。

取り敢えず、これからまたアレらを片付けに行ってきます。

それでは皆様、良いクリスマスを！！

## 十一、刀

広間には、いつの間にか静寂と言う名の、それまでとは比ではない緊張が漂っていた。

誰もが一心に洗月の横に小さく佇む巫女装束の老女に視線を向け、その一挙一足を見守っている。

しかし、見つめられている老女だけはそんな視線に関わらず、呆然とした視線を向ける颯月さえも素通りし、その前で状況が未だに読み込めずにおろおろとしている沙夜に視線をとめた。

「……!!」

その瞬間、老女の皺に隠れて見えなかった瞳が大きく見開かれた。信じられない、とでも言うように口を開け何か言葉を紡ごうとする。

「月の民……!!」

(月の……民?)

その噎れた唇から漏れた聞き覚えのない単語に、沙夜は思わず眉根を寄せた。

「老巫女さま？」

その隣で、洗月と共に登場したもう一人の青年が少しく心配したように声を掛ける。

それで、彼女は正気に返ったようだった。ああ……と何か声に

ならない声を漏らし、そしてそれを黙然と見つめていた洗月の方に視線を向ける。

「・・・里が慌ただしかったのは、これが理由かい」

「はい」

「そうか・・・まさか」

もごもごと口の中でなにやら不明瞭な言葉を紡いだ後、老女は嘆息し静かに沙夜に歩み寄った。

そのまま、じつと沙夜を凝視する。

「あ、あの・・・」

「よく似ている。あんた・・・名は、何というんだい」

「沙夜・・・です」

「そうか・・・沙夜、あんた ツキカケラ 月神楽 を持っているね？」

月神楽。

そう確信めいた口調で言われ、沙夜は戸惑った。

目の前の老巫女と呼ばれた老女の瞳は確信に満ちており、沙夜がそれを持っていることに微塵も疑いを抱いていないようだ。

「・・・わたし、月神楽 なんて知らないです」

「そんなはずはない。その独特の気配を持っているってことは確かに、あんたは 月の民 で」

そこで、唐突に老女は言葉を切った。

まさか、とその乾いた唇が動く。

「・・・あんだ、まさか何も知らないのかい？」  
「え・・・？」

何も知らない。

その言葉の指す意味が分からなくて、沙夜はだんだんと混乱してくる。

そんな沙夜たちに、口を挟んだ人物がいた。

「懐剣だ」

ぼそりとそう呟いたのは、洗月だった。

思わず見た沙夜たちに、彼はおもむろに組んでいた腕を解き、沙夜の胸元の辺りを指さす。

「・・・持っているだろう、今も。」

「あ・・・」

はっとして、沙夜は自分の胸元に視線を向ける。

・・・母の形見であり、自分にとって護り刀でもあるあの懐剣。

「見せる」

やはり淡々とそう言った洗月に、沙夜は恐る恐る懐から懐剣を取り出した。

広間の灯りに照らされて、黒塗りの鞘が一段と濡れたように輝く。特に凝った装飾のされていない刀であるのに、ただそこにあるだけで自然と目を引く存在感を、その黒塗りの懐剣は放っていた。

「月神楽・・・」

ぽつりと、そう老女が呟いた。

## 十一、刀（後書き）

遅くなりまして、皆様明けましておめでとございます！

昨年はこのような雑作にお付き合いいただき、本当にありがとうございます。  
ございました。

今年もまた、ちまちまと書いていきますので、宜しければどうぞお  
付き合いお願いいたします。

## 十二、波紋

ツキカケラ  
月神楽。

それは、古代に月の女神が一握りの女神の声を聞くことが出来た人間に贈られたと言われる破魔の剣。

その中でも、特に強い霊力を秘めたものは 月神楽 の正当後継者でありそれを持って妖魔を滅する使命を持つという。

しかし、それを扱うことが出来るのは月の女神から祝福を受けた者達のみ。

その選ばれた一族のことを、人はみな月から愛された一族という意味を込めて 月の民 と呼んだという。

「そん、な・・・」

沙夜は呆然としていた。

目の前で、今そう話した老女は何も言わない。ただ、黙って沙夜を見つめるその瞳はおそろしいほど透き通っていて、今話した内容が全て真実であるということが無言で沙夜に告げていた。

「わたしが・・・母様たちが、妖魔を滅する使命を持った、一族・・・」

「？」

とても信じられる話では無かった。少なくとも、沙夜は 自分たちはごく普通の、少しだけ人里離れた山奥に住むだけの変わった一族だと思っていたから。

思わずそう沙夜が呟くと、静かに目の前の老巫女の口が開いた。

「・・・確かに 月の民 は、一見はただ人とどこも変わらない。しかし、唯一その身に宿った使命なのか、彼らはただそこにいるだけで妖魔を引き寄せる不思議な体質を持っていた」

それは、次第に疎まれるようになるには十分過ぎる理由だっただろう。外見は全く同じように見えるのにただそこにいるだけで、妖魔を誘き寄せ、人であつて人でない『イキモノ』と見られるのは。

だから、と老巫女は続けた。

「・・・彼らは、山に入った。人里には彼らの生きていくことが許される所が無くなってしまったからじゃ。幸いと言つべきなのか、彼らには月の女神の祝福によって妖魔が入って来られないよう結界を張ることが出来たからな」

「結界・・・を」

その言葉に、思わず沙夜ははっとした。幼い頃、母が言った言葉を思い出す。

『あなたは、まだ村で守られているから分からないだろうけれど』

村で守られているというその言葉。

あれはつまり、このことを差していたのだ。

ぎゅ、と強く懐剣を沙夜は握りしめ目を強く瞑って下を向いた。

瞼裏に蘇るのは、赤。深い、世界を埋め尽くしたように思えた深紅。

それは決して忘れられぬ、沙夜の大切な人たちが消えたあの夜のこと。

「・・・わたしの郷は、十年前に滅びました」

震えないように、下腹に力を込めて沙夜は言葉を紡ぐ。はっとしたような気配が広間にさざ波のように広がるのを感じながら、ゆっくりと沙夜は顔を上げた。

「・・・まだ、わたしがまだ六つだった頃、です。妖魔が入れない結界が張られていたというなら・・・どうしてわたしの一族は・・・母様は死んだんですか」

教えてください。そう言った沙夜の瞳は、先程までの弱々しい少女とは思えないほど強い光を持っていた。

「それは・・・」

「 上級の妖魔によって、その結界が破られたからだ」

老巫女が口を開こうとした瞬間、淡々と口をそう挟んできた洗月は、静かに沙夜を見た。その静かな瞳に、気圧されるような感じを受け

て、沙夜は思わず口を噤む。そして洗月は、それまで黙然と話を聞いていた颯月を振り返った。

「颯月さま、今宵はここまででよろしいでしょうか。この娘はあまりにも多くのことを言われたせいで混乱しているようですから」

その洗月の言葉に沙夜はそんな、と思わず声を上げようとした。しかし先に上座に座る颯月が、ふうと溜息を吐いたことでその機会は逃される。

「……良いだろう。今宵は取り敢えずその娘とお前の議論が目的だったのだからな。実を言うとなたしも少し混乱している。何しろ……月の民が滅びたというのだからな」

その言葉にまた大きく広間がざわめいた。一斉に見られたことを意識し、沙夜はまた身体を固くさせる。

そんな沙夜に、上座の上の颯月が改めて声を掛けた。

「沙夜さん。取り敢えず、君のことはだいぶ分かった。目を追って君の処遇を知らせよう。ふむ……今宵は臯月のところが君にとって良いだろうな」

ぱん、と軽い拍手の音がその場に響く。やがて広間の入り口には穏やかに微笑む見慣れた姿が現れた。現れた臯月は静かに上座の上の颯月に一礼し、すつと沙夜に手を差し出す。

「行きましよう、沙夜さん」

「っ……っ」

そのとき、沙夜は本当はまだ行きたくないと思った。しかし、少し

だけ強く引つ張られた手に思わずはっとして臯月を見る。臯月の瞳は、ここから出るように強く促していた。

これ以上は、と。

(・・・だめ)

・・・唇を噛みしめる。そして、沙夜は促されるまま静かに広間から出て行った。

ざわめく人々と金色きんの瞳の青年を、後に残して。

## 十二、波紋（後書き）

お、終わり方が無理矢理過ぎる・・・。

遅くなりまして、本当にすみません！

気がつけば一ヶ月も放置していました・・・！ あわわ、まずすぎる・・・。

取り敢えずまた細々更新していきますので、よろしくお願いします  
！！

### 十三、動揺

『あの夜』から、すでに三日が過ぎていた。

けれど、沙夜の身の周りには何の変化も無かった。ただ、皐月の家で寝起きをするというそれだけの日常。

それを不安に思う一方で、沙夜はそんな日々を戸惑いながら過ごしていた。

「沙夜さん、これもお願いしますね」

「あ、は……はい」

声を掛けられ、川岸でぼんやりとしていた沙夜は思わずびくりとした。手渡された洗濯物を受け取り、それを慎重に川の清流に浸す。

手早く目に付く汚れを擦って水を切り、二度沙夜はそれを皐月に手渡した。

「あの……終わりました」

「ありがとう、沙夜さん。……あら、今日の洗濯はこれで終わりね」

洗い終わった衣服を盥に入れ、そう穏やかに言った皐月は沙夜に手を差し出す。それを躊躇いながらゆっくりと沙夜は握った。

この三日間というもの、沙夜は皐月の家事の手伝いをする日々を送っていた。洗濯、薪取り、食事の支度。山での生活は、村でならば比較的楽にできる家事であっても、その一つ一つが大変だ。今の洗濯にしてもそう、この谷間の村では比較的楽な部類に入るとはいえ、川で洗濯をする足場の確保などに気をつけないといけなかった。

滑りそうになる足を必死に堪えながら、臯月の手に引かれて村へ戻る。その途中で、臯月が朗らかに言った。

「それにしても、沙夜さんのおかげでこの頃はやく家事ができて本当に助かるわ」

「いえ・・・そんな」

まだこの辺りは慣れないだろうから、と言って引かれる手に相変わらず戸惑いながら、沙夜は答える。実際、これくらいは沙夜のもとした里では洗濯は彼女に与えられる仕事の一つだった。だから、本当にたいしたことではないのだと言うと、臯月にはっこりと笑った。

「そうことじゃなくて。こうして早く終われるのも沙夜さんが手伝ってくれるからでしょう？ だから、ありがとう」

そうにっこりと言われた言葉に、沙夜は頬が熱くなるのを感じながらそっと俯いた。

こうして、掛けられる温かい言葉に沙夜は未だ慣れなかった。どう反応すればいいのかわからなくなるからだ。

「あ、沙夜ちゃん!!」

そのとき、高い声が聞こえた。

思わず沙夜が顔を上げると、いつの間にか臯月の家まで戻ってきていたらしく、その入り口では小柄な一人の少女がぶんぶんと手を大きく振っていた。

「あら、癒月<sup>ユツキ</sup>。あなた今日も来たの」

「だって何もなし・・・ここに来れば暇も潰れるんだもの」

それに沙夜ちゃんもいるし、と屈託無く笑いかけられ、沙夜はぎこちなく微笑んだ。癒月、という皐月の姪であるこの少女は、沙夜の何が入ったのか、この三日ほどよく皐月の 正確には沙夜の元をだが 訪れていた。

「もう、何言ってるの。貴方が何も無いのはいつものことじゃないの」

「だって本当につまらなんだもの。それより皐月さんの方こそ、お客さんの沙夜ちゃんに洗濯やらせるなんてちよつとないと思うけど？」

「い、いいえ・・・違つんです」

むつつと癒月の言った言葉に、慌てて沙夜は否定した。

「私が・・・何かやらせてくださいと頼んだんです。何か・・・動いてないと不安で・・・」

知らず知らず、沙夜は胸元にある懐剣に手をやる。あの話し合いの夜から、沙夜はずつと考え続けていた。

自分のこと。母のこと。そして・・・あの夜のことを。

だが、そのどれもがどんなに考えても、すぐに行き詰まってしまったのだ。・・・あまりにも、沙夜に知っている、そして教えられたことは少なくて。

「どうしても・・・変なことを考えてしまつて。だから・・・」

そう言つてぎゅつと握りしめられた沙夜の手に、ふわりと何かが覆い被さつた。

驚いて見ると、目の前には真剣な表情の癒月の顔があつた。

「・・・うん。分かった」

そうだよね、と癒月はそう言って少し笑った。

「沙夜ちゃんが心配になるの、無理ないよね。・・・でも、絶対に沙夜ちゃんに悪いようにはしないから」

そう言う癒月の瞳には、真摯な光があった。そういう顔は、皐月と初めて出会ったときに見た表情にどこか似ている。

「・・・はい」

思わず、沙夜は引かれるようにしてこくりと頷いた。すると、癒月の顔がほっとしたように緩む。

それを見計らったように、それじゃあ、と皐月が明るい声を上げた。

「ちょうどいい時間だし、昼餉にしましょうか。沙夜さん、手

伝ってくれるかしら？」

「あ・・・はい！」

「癒月もね」

「うえ！？ 何で私まで!？」

抗議の声を上げた癒月に、につこりと皐月は笑う。そして「それじゃあ昼餉、いらぬのかしら？」と言い放たれた言葉に、癒月はうつと詰まった。

そして、先に折れたのは当然のように癒月の方だった。

「うう・・・喜んで手伝わせて頂きます・・・」

「はい、どうも」

その棒読みに近い返答にくすくすと笑いながら、皐月が「それじゃあ、行きましようか」と言う。  
そのやりとりは、沙夜もいつの間にか自分では気がつかないうちに、口元に小さな笑みを浮かべながら、皐月達の後を追って家の中に入ったのだった。

・・・ゆらり、ゆらりと灯が暗闇の中で大きく揺れていた。

定まることなくただ翻弄されるかのようにただ揺らめくその明かりは、まるで今話し合いの渦中にいる少女のようだ。紛糾する話し合いなどどこか遠くに感じながら、彼は不意に目端で捉えた光景にそう思った。

「・・・では、本当に良いのだな」

同時に静かな声が彼に降り注ぎ、すつと彼は目の前の話し合いに意識を戻した。

幾つもの視線が突き刺さってくる。それらの大半は、好意的なものではなく、ただ長である颯月の言葉だから何も言わないというだけの冷やかなものだ。だが、彼はそんなものを意にも介せず静かに頷いた。

「はい」

「・・・そうか」

決まりだな、と颯月が呟いた。それに「長!?!」「まさか本当に!?!」と口々に言ってくる者達を、一瞥し、黙らせた颯月は重々しく口を開く。

「あの娘は

」

### 十三、動揺（後書き）

終わり方、中途半端ですみません・・・

次も頑張ります！

## 十四、許嫁

婚姻という、その言葉は沙夜にとってもっとも縁の遠いものだった。

なぜなら、村では『忌み子』として扱われてきた沙夜には当然のように婚姻など、ましてや許嫁などがあるはずも無かったからだ。

村でただあくせく働く傍ら、自分と同年代の少女達が頬を染めながら恋しい男のことを語る光景を遠くから眺めながら、沙夜はずっと思っていた。

自分はきつと、死ぬまでここで働き続け、恋などましてや婚姻などすることはないだろう、と。

それが、ここで『忌み子』として扱われる沙夜の現実だったからだ。

・・・だから、その言葉を聞いたとき、沙夜は何かの冗談としか思えなかった。

「あ、の・・・今、何て・・・？」

強く拳を膝の上で握りしめる。そして、ゆっくりともう一度聞いた沙夜に向かつて、淡々とその沙夜の『処分』を伝えにきた使者は答えたのだった。

「貴方さまには、我が里の長である颯月さまの「ご子息」、洗月さまの花嫁となって貰います」

許嫁、だという。

婚姻を正式に今、結ぶのではなく、あくまでも許嫁だと。

「どうして……」

そう聞いた沙夜に、使者はあくまでも事務的に「長の命です」と繰り返した。

そして、沙夜を立ち上げるように促す。立ち上がった沙夜を見ると、戸口へと歩いて外へ出た。

「あ、あの……」

「これから、貴方を洗月さまの元へ連れて行きます」

有無を言わずにそう言い放つと、ぐい、と使者である人物は容赦なく躊躇ためらう沙夜の腕を引つ張った。

思わず呻いた沙夜に、それまで横で沙夜の『処分』に顔色を変えるも黙ってその場に座していた皐月が「……待ちなさい！」と声を上げた。彼女は、この長くもなく短くもなかった生活の中で、この小さな少女がどのような人生を歩んできたか、正確に悟っていた。その彼女が、容赦なく罪人のように引つ立てられてどこかに連れて行かれるのを、彼女は見過ごせなかったのだ。

「沙夜さんをどこに連れて行くつもりなのですか！ 彼女は洗月さまの許嫁であると、今あなたは言ったはず……ならばそのような乱暴な扱いはやめなさい！」

凜、とした声が夜闇をうった。その気迫に満ちた言葉に、さすがに使者は聞かずにいられなかったらしい。ぐっと黙った後、沙夜の手を離す。そして、「・・・分かりました」と努めて慇懃に言った。

「失礼な振る舞い、申し訳ございません。しかし、彼女を連れて行くのは洗月さまの指示なのです。どうかそれはご容赦ください、臯月様」

「・・・それは、どういうことなのですか」

「我らにも分かりません。ただこうして命じられ、私が使者として赴いた次第でございます」

その返答に、臯月は溜息を吐いた。そうして、ゆっくりと沙夜を見る。その瞳が心配そうに揺れているのに、沙夜は気づいていた。だから、沙夜は精一杯笑って見せる。

「大丈夫・・・です」

それは、いつかの夜と同じ言葉だ。目の前でぎこちなく、しかし間違いない笑みを浮かべてこちらを見てくる沙夜に近づき、臯月はぎゅっと抱きしめた。

そうして、使者に連れられて出て行く沙夜の小さな背中が夜闇に消えていくのを、その場に立って見えなくなるまで臯月は見送っていた。

## 十五、痣

それから、沙夜が使者に連れられてやってきたのは、里から少し離れたところに立つ小屋の前だった。

ただそれは他の里にある家とは違い、地面から柱が立てられているために少し高い所に床がある。そのため、闇の中で一際、その小屋は異彩を放っていた。

「あの、ここは…」

「洗月さまの家でございます」

おそるおそる尋ねた沙夜の問いは思いがけず返された。そして音もなく跳躍してその小屋に近寄ると、中に向かって何かを囁く。その様子を見ると、やがて白い蓋布が二度振り返った。

そして。

「きゃっ！」

戻ってくる。と、同時に担ぎ上げられ、次の瞬間には沙夜は小屋の前にいた。どうやら沙夜を連れてくることが目的だったらしい。目を白黒させる彼女に、「では、これで」と使者は言うなり飛び降りる。

「え、あ…待っ…！」

待って、と。そういう前に、白い蓋布はあっという間に夜闇へと消えた。それを思わず呆然と見送り、沙夜はやがてゆっくりと背後を振り返った。

「……」

手を伸ばす。すると、それを見計らったかのように中から「入れ」という声が響いた。

その声に、びくりと身を縮ませながらも沙夜はゆっくりと戸を開いた。

「…来たか」

そして、沙夜の目には一人の青年が映った。

外側から見たのでは分からなかったが中は意外と奥行きが深くなっているらしい。その部屋の中央よりやや右側には灯台が一つあり、それが小屋の中を薄暗く照らしていた。そしてその左側。そこには、一人の青年が壁に背を預けてこちらを見ていた。

最初に目を引いたのは、まるで闇をそのまま切り取ったかのような艶のある長い黒髪。

それを無造作に一つにまとめ、後ろに流している青年は美しい黄金きんの瞳をしていた。

「……」

少しの間、その場に沈黙が満ちる。何も言わず、固まっただままの沙夜に青年 洗月は視線を向け、「座れ」と言った。

その声に、弾かれたように沙夜は慌てて座る。目の前に座ると、洗月の瞳が沙夜を真っ直ぐに射貫いた。しかしそれは仮にも許嫁である人物に到底見せるものではないであろう、例えるなら月光の青白い冷たさにも似た瞳だった。

そんな暖かみを感じられない瞳に見られた沙夜は思わず身を震わせ

る。

しかしそんな沙夜の様子など気に留める様子もなく、彼は淡々と口を開いた。

「先に言っておく。俺は、お前を許嫁にするが婚姻する気はない」

「……え？」

「お前を許嫁にしたのは、お前を使ってある妖魔を誘き寄せることが出来るからだ」

出てきた思いがけない言葉に、沙夜は混乱するよりも先に戸惑った。未だにそう思うことは戸惑うが、あの老巫女のいうことでは沙夜は月の民 という妖魔を誘き寄せる特殊な体質を持つ一族らしい。

身の内に秘めた力のせいなのか、それは意図せず妖魔を誘き寄せるが、あくまでそれは不特定多数の妖魔であって、特定の妖魔を誘き寄せることはできないはずだった。

眉をひそめ、しかし次に放たれた言葉に彼女の顔は大きく強張った。

「お前の一族である 月の民 は上位の妖魔によって殺された、ということももう知っているな」

コロサレタ。

その言葉に沙夜は頭から冷水を浴びせられたような心地に陥った。そんな蒼白になった沙夜に感情の見えない瞳を洗月は向けながら、次の瞬間、彼女にとって驚愕の事実を放つ。

「俺はお前の一族を全滅させた妖魔を知っている」  
「……!？」

息を呑んだ沙夜に、洗月はすっと目を細めた。

「名は**嚙鬼**。<sup>えんぎ</sup> 人語を解し、操ることが出来る数少ない上位の妖魔の一匹だ」

その言葉に、沙夜の瞳が大きく見開かれた。

「えん・・・き」

「人間と変わらない知能を持つているとは前に言っただろう。上位の妖魔は他の妖魔を統率し、掌握することができる。例えば、人のように秩序を持って集団で襲うことが、だ」

その見透かしたかのように言われた言葉に、沙夜の脳裏にある光景が蘇った。

郷に『あり得ない』はずの火がつけられたあの夜。

燃えさかる郷に現れた、尋常ではないほどの妖魔や獣の群れ。

そこから必死に逃げ延びた先、あのときに沙夜は。

“ ホウ。マダイキノコツテイルヤツガイタトハナ ”

「・・・っ!!」

その瞬間息を詰めた沙夜を、相変わらず冴月は冷静な瞳で見遣っていた。

しかしそれは、感情がないというよりは何かを推し量るかのような目だ。

「・・・会ったのか」

やがて掛けられたその確かめるような声に、力なく沙夜は頷いた。

「・・・そうか」

静かに首肯する気配がした。それは今までの淡々とした言葉とは違い、少しだけ何かの感情が覗く。しかし、それが何か掴む前に言い放たれた「それなら、話は早い」と続いた言葉に沙夜は思わず顔を上げた。

そして、それが目の前の金色の瞳とぶつかる。

「お前は、確かに狙われている」

「え？」

「嚙鬼は狙った一度狙った獲物は決して逃がさない」

首筋に痣があるだろう、と言われた言葉に沙夜は思わず目を見開き、そして、次に言い放たれた言葉に彼女は凍りついた。

「それは、そいつが付けたもの。      自分の獲物であるというシルシだ」

小屋の中が、急に暗くなったような気がした。

微かに自分が震えていることにも気づかず、沙夜はそっと自分の首筋に手をやった。

黒く長い髪をかき分け、やがて露わになった細く白い首筋には、この薄暗い小屋の中でも一際、鮮やかな燃えるように赤い痣アザがあった。しかしその毒々しいまでの色彩いろを目にしてもなお、洗月は泰然とした態度を変えず、さらに沙夜に残酷な言葉を告げた。

「そのシルシをつけられた者は、人が妖魔に対して抱く嫌悪や憎悪といった感情を向けられるようになる。持った気配が妖魔のもつそ

れと酷似するようになるからだ」

「・・・あ」

その言葉に、沙夜はゆっくりと片手を額にあてた。

蘇るのは麓の村に流れ着いた十年前のこと。突然、態度を豹変させた村人たち。

・・・ならば、沙夜が過ごしたこの十年は。

「俺は、奴を討つ」

「！」

静かに、しかし確かに力が込められた言葉に、沙夜ははっとして目の前の洗月を見た。

冴え冴えとした金色の瞳が沙夜を見た。

それは、一切の感情を切り捨てた目だ。

だが、何故なのか。それを怖いと確かに感じているはずなのに、沙夜はその瞳を魅入られたように凝視した。

・・・そして。

「シルシを持つお前を必ず嚙鬼は狙ってくる。だから、俺はお前を使う。」

使う、と。

まるで、モノでも扱つかのように。

一切の反論を許さないと言つように、そう宣言した洗月を、沙夜は  
何も言えずにただ見つめることしかできなかつた。

## 十六、闇夜

俺は、お前を使う。

そう、言われた。

あの夜、初めてわたしの手を掴んでくれた人に。

そう言った彼の瞳は、とても鋭くて怖かった。

・・・なのに、どうしてなのだろう。

そう言った彼の瞳で揺らめいた灯りと同じように、深奥に微かに見えたもの。

その束の間過ぎった感情を、『知っている』と感じてしまったのは。

夜半の暗い山奥には、闇に紛れて蠢く者達が居る。  
その大半は妖魔であるが、例外も存在した。

そして、その数少ない『例外』であるものは今、息を乱しながら夜の山中を走っていた。

「はあ、はあ、はあ・・・!!」

ひた走る。

その音源の持ち主である人物は頭からつま先までを覆う白い蓋布を被っていて、目元がまったく見えない。

しかし、僅かに見える口元はきつく噛みしめられ、相当な恐怖の中にいるのだらうと推測できる。

後方。そこには赤い、まるで血のような瞳が爛々と追いかけてきているからだ。

「・・・きゃっ」

しかし、背後に気をとられ過ぎていたのだらう。

ぐらりと足がもつれ、体勢を崩したとその人物が悟って息を呑んだその時には、すでに遅かった。

蓋布が外れ、その人物は大きく前へ倒れ込む。

長く美しい黒髪が夜に舞った。

現れたのは、おそらく十代後半だらうと思われる一人の少女だ。

そしてそれを見た 例えるのなら大型の犬のような その追ってきていたモノは、にいっ・・・と不気味に口元を横に裂いて赤い口腔を覗かせた。

ニンゲンは、この山奥に住まう彼等にとって極上の獲物だ。

「キヤキヤキヤ・・・!!」

耳障りな甲高い声はその場に響く。  
それはまさしく歓喜の叫びだった。  
そして、目の前でただ震えてこちらを見てくるその娘に向かってその妖魔は勢いよく鋭い爪と牙を向けて飛びかかる。

しかし。

ザンツッ！！

『キヤアアアアツッ！！』

絶叫が夜陰に長くこだました。

しかし、それはまるで獣のような荒々しい叫びだ。  
突如切り落とされた前肢の痛みに振り回し、そしてその妖魔は見たのだった。

目の前に冷然と佇む、まるで彼らが闇の中では唯一恐れる月色の瞳をした青年を。

「ゲキヤ…」

本能が危険を感じ取る。後退し、逃げようとした次の瞬間に容赦なく銀色に輝く何か降りおろされ、その妖魔は意識を永遠に途切れさせた。

・・・目の前で黒い霧に包まれて消えていく妖魔を、沙夜は呆然としながら見ていた。

闇から出でると言われる妖魔は、死んだら骨も血もその存在を証すものは何も残らない。

微かに漂う障気が頭痛を伝えてくるのを感じながら、沙夜はがくがくと、決して疲労のせいだけではない足を震えさせていた。先程まで爛々と沙夜を見据えていたその赤い瞳は今では暗く濁り、虚ろに虚空を見つめている。

「おい」

その前に立っていた一人の青年が、振り返る。

すらりとした肢体に白い蓋布を羽織った洗月は、じろりと沙夜を見た。

その瞳には、呆れと僅かな苛立ちが見える。それを読み取り、沙夜は慌てて言葉を紡いだ。

「・・・っ、ごめんなさ」

「お前は、黙ってついてくることもできないのか」

その冷たい響きの言葉に、思わず沙夜は言葉を呑み込む。

それが、事実だったからだ。鋭く見据えてくる洗月の瞳に耐えきれず、沙夜は目を地面に落とした。

「・・・戻ろぞ」

やがて、溜息を苛立ちと共に吐き出すようにしながら、彼は身を翻

す。

その声に促されて立ち上がりながら、沙夜は今度こそ迷わないように、疲労で震える足を堪えてその背を懸命に追ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0750n/>

---

月 神 楽

2011年10月6日19時20分発行